

コメント③

大学史資料を展示する

——京大での実践から——

西山伸

- 一 概要
- 二 展示内容
- 三 制作にあたっての留意点

私は、京都大学での大学史の資料を使った展示に絞って、実践をお話しします。

一 概要

京都大学の歴史展示は、時計台と言われる建物で行っています。この建物は一九二五年に竣工し、いわば京都大学のシンボル、受験生向けの冊子の表紙にくる建物です。これは京都大学百周年を記念して、外装は残しつつ、中身を全面的にリニューアルしました。以前は、総長室や幾つかの事務室と、法学部・経済学部の教室がある建物だったのですが、全面的な改装が二〇〇三年一二月に終わりました。その結果として、いろいろな国際会議ができる記念ホールや、ちよつとお酒が飲めるサロン、フランス料理のレストランなども入りました。つまり、教室は一切外に出て、大学の事務職員や学生というよりは、学外の方が普通に出入りできる場所として生まれ変わったということです。この建物は、年末年始以外は、土日も含めて朝は九時から夜は一〇時まで開いています。その中に、私どもの歴史展示室も置かれることになりました。

時計台記念館が改築されたときのコンセプトは、当時作成された資料によると「異分野学問領域の間のみでなく、大学と社会の学術的な交流のためのインターフェイスとなるような施設」として生まれ変わったということです。

二 一 展示内容

一階の入り口から入ってすぐ右側にある歴史展示室の入り口です（スライド四枚目）。歴史展示室は面積が三〇〇平米ほどあり、そのうち、右側の縦長の約二〇〇平米ほどを常設展の「京都大学の歴史」ということで配置しました（スライド五枚目）。それから、左側の手前は六〇平米ほどありますが、戦後の改革の中で大学の中に包括されていく旧制高等学校、京都には第三高等学校がありました。第三高等学校の常設展をしています。それから、左奥の四〇平米ほどのスペースは企画展示室です。常設展は基本的に文字通りの常設展で、原則は展示替えを想定していませんので、その分、企画展示室で年に二回、大学文書館で京大の歴史に関わる展示を行うスペースとして、配置しました。

これが展示室の全景です（スライド六枚目）。教室を改築したこともあり、非常に太い梁が天井から下がっていて、あまり高さが無い。展示をするときには、開放的な、高さがぼんと抜けたスペースが一番いいのですが、残念ながら、それは条件的に難しかったのです。その代わり、太い梁のところにスポットライトがコウモリのようにたくさんぶら下がっています。このような使い方もできたと思っています。

常設展の周りを取り囲むようにケースが置いてありますが、これは創立から現在まで八つのテーマで、一テーマ、一ケースということでケースを配置しています。真ん中にあるのが模型です。

一九三九（昭和一四）年の京大の本部構内を再現する模型を造りました（スライド七枚目）。私も文書館が展示を作れと言われて企画したわけですが、私どもが作るとうとうしても紙資料や写真ばかりになってしまふので、展

示の中に何か立体物を入れないかということで、模型を造ろうということとは計画の中に早くからありました。いつもの模型を造るかはなかなか難しくして議論はありましたが、当初は京大ができた一八九七年ごろのキャンパスの再現も考えました。しかし、資料がそろわないことと、建物が少なくて寂しいということもあり、帝国大学時代の完成期に当たる一九三九年の模型を再現してみました。

これは私個人の趣味・嗜好の問題もあるのですが、造っていてとても面白かった、楽しかった仕事でもあります。キャンパスは、一九六〇年代ぐらいまではこの姿でした。一九六〇年代の高度成長期に入ってから、レンガの建物が次々と入れ替わっていき、あえて言えば無味乾燥な鉄筋コンクリートの建物に代わっていくわけです。そうすると、現在七〇代以上ぐらいの卒業生であれば、このキャンパスで自分の学生時代を過ごしたことになります。例えば時計台記念館の別の部屋で同窓会があり、その流れで展示室へ来たというようになると、自分はこの建物で勉強したとか、この建物で入試を受けたとかで、来られた方たちがとても盛り上がるのです。それは見えていて、作ってとてもよかったと思わせる光景で、そうした効果は正直、造ったときには考えていませんでした。創立期の模型であれば、そういったことは起こらないわけで、一九三九年時期のキャンパスを再現したことで起こった、うれしい副産物です。

これがそれぞれ常設展の一テーマに充てたケースの一つ分です（スライド八枚目）。これは創立期です。それぞれ特注で業者さんをお願いして造っていただきました。

これは下宿の再現です（スライド九枚目）。ちなみに、生活面の展示は資料がないので一番難しいのです。自分の下宿や部屋を写真に残しておく人は非常に少ないですし、日記の中に事細かに調度品を書く人はほとんどいないからです。実際、展示がオープンして一番ご意見が多かったのはここで、つまり「わしのころと違う」ということ

です。いろいろと展示品の入れ替えをしたのは、ここの下宿です。

実はCGの映像も置いてあります。学内に学術情報メディアセンターがあり、その中にコンテンツ作成室という部署があります。そこは教育機器としてのCGを教材として作っているところで、その方と一緒に創立期の京都大学という一〇分ほどのCG映像を作りました。できたころの京大の学生が朝、通学して授業を受け、ご飯を食べて、図書館で勉強して帰っていくというような一日を、CG映像で一〇分ほどのストーリーを作ってみました。

私などは展示の全くの素人ですが、いろいろな機器、新しい技術を使っているいろいろな見せ方をするのは、革新的で挑戦的な方法だと思えますが、大きな問題は、そういうものは逆に言えば、すぐ古びてしまうことです。このCG映像も、一〇年前に作ったときにはすごいと思つたのですが、今見てみると、やはり古びてきたなど。何となく歩き方が不自然だとか、今だったらもつときれいに見せられるということがあります。新しい技術を使うときの問題はそういうところにもあると思つています。

こちらは、先ほど少しご紹介した配置図の左手前にある、第三高等学校の歴史の常設展です（スライド一一〜一二枚目）。これは去年オープンしました。今、全国の旧制高校の同窓会は解散していますが、偶然、三高の同窓会の解散と同じときにオープンしたということで、新聞等にも取り上げられた展示施設です。

特に私どもと同じような仕事をしている皆さんはご経験があると思いますが、卒業生の旧制高校に対する思い入れ、愛情は、とても私どもには理解できないものがあります。三高などは特にそうだと思います。一応このような施設を作ったということで、非常にお喜びいただいているようです。その機会にということで、三高基金を設けて募金してくださいとお願したところ、かなりたくさんの募金を頂いています。同じ方が何回も募金されたり、こ

ここに来られるたびに、幾らかずつ募金して下さる方がいらつしやったりして、やはり旧制高校に対する皆さんの思い入れは違うのな、とつくづく思つたりしています。

こちらは企画展のスペースです（スライド一三〜一四枚目）。四〇平米ほどで、先ほど言いましたように、年に二回やっています。こちらはテーマ設定などは比較的自由にやらせてもらっています。別表（京都大学文学書館企画展等一覧）を見ていただければ分かりますが、戦前がどうしても多くなります。しかし、中には今から五年前、一九六九年から四〇年というところで、大学紛争のことも企画展として取り上げられました。そのときは新聞にも結構取り上げてもらい、（当事者が）もし暴れ込んでこられたら困ると思っていました。そういうことはなく、逆に「紛争期の資料があるから寄贈したい」というお申し出があつたり、「資料はないけれど、おれの話聞け」と言ってくる方もたくさんいらつしやいました。

このような形で、二〇〇三年一二月にオープンし、もう一〇年以上たっているわけですが、展示は私どもの文書館の重要な業務となっています。

これは年ごとの入場者数です（スライド一五枚目）。年によって若干上下はありますが、大体三万人前後です。何といつても無料だということと、場所の良さもあると思います。先ほどのフランス料理のレストランの待ち合わせをした方もいらつしやるようです。

数として一番たくさん来ているのは、高校生、受験生だと思います。オープンキャンパスの二日間で六〇〇〇〜七〇〇〇人来るのですが、それだけではなく、京都ですから修学旅行で京大がコースになっていて、大学生がボランティアで京大を案内します。

次に多いのは、一般の方だろうと思います。時計台記念館自体は毎日開いていて、この間の連休は観光客が紅葉

を見に京都にどつと来られた時期で、そういうときの入りはとも多いのです。平日よりも土日の方が入られる数はぐつと多いのです。そんなことを考えると、一般の観光客の方が次に多いのではないかと思っています。

その次に多いのが、時計台記念館で学会や研究会、講演会、シンポジウムなどがあり、その流れで来られる方だと思います。その中には外国の方も含まれます。そんなこともあり、英語版の図録なども作成しました。

一番来ないのは現役の京大生です。今日のテーマにも関わるかもしれませんが、これは本来、自校教育にも使わなければならないのかもしれないかもしれません。最も関心を持たないのは多分、京大生なので、現役の学生と教職員へのアピールはまだまだ足りないと思っています。

これは去年、海外の大学院生たちに対して展示を案内している私です（スライド一六〜一七枚目）。このような展示の案内にも駆り出されることがよくあります。

三 制作にあつての留意点

展示をつくるにあつて、私どもが何を注意したかということをおいづくままに振り返つて挙げます。

一点目は、多様な展示方法を心がけることです。模型、下宿の再現、CGなどで、紙資料や写真資料だけではない展示方法をするように心がけました。

二点目は、研究成果の取り扱いです。ノーベル賞の話なども先ほどから出ていますが、こういったものをどうするのかということですが、取りあえず、私どもはここでの展示は、大学の組織としての移り変わりや、学生生活の移

り変わりなどに焦点を当てる展示として一応特化しました。京都大学には、総合博物館という立派な博物館がありますので、研究成果は基本的にそちらでやってもらおう。こちらは組織の移り変わりや学生生活等を中心とした、大学そのものの歴史を展示するというような形で、分けたつもりです。

ただ、例外があります。哲学の西田幾多郎と物理学の湯川秀樹だけは一つのコーナーを設け、研究成果に関わるような展示物を常設してあります。さすがにこのお二人を外すわけにはいかないだろうということや、文系と理系でバランスもちよいといいいいということもありました。これを増やしはじめると、「何でわしの先生がおらんのや」という話に必ずなりますので、ここでとどめておく。研究成果の取り扱いについては、そういう意味では非常に禁欲的であつたということです。

それから、寺崎先生のご講演の中にもありましたが、例えば戦時期や紛争期のように扱いにくいテーマはどうするのかということ。先ほど寺崎先生は、沿革史編纂の中で、あるいは自校教育の中での取り上げ方を話されました。展示の場合は少し事情が違ふと私は考えます。言葉が空気になつて、あるいは対象が限定されている教室での教育と、読む人も同業者や専門家が多いと思われるような沿革史編纂と違い、展示は誰が来るか分からないわけです。場合によつては、初めから悪意を持つて見に来る人もいるかもしれません。

これは二〇〇三年にオープンしたわけですが、当初は、つぶしに来る学生がいるのではないかということ結構まじめに心配しました。つまり、一九九〇年代前半ぐらいの京大であれば、必ずつぶしに来る学生がいたと思います。つまり「帝国大学を賛美するのか」ということで、ペンキをまきにくるような学生が絶対いたと思うのですが、幸い、そういうことはありませんでした。それは極端ですが、展示の場合は、どういふ方が見にくられるか分からない。その中で、基本的に表現としては限定されざるを得ないという面はあります。もう一つの限定は、展示は現

物の資料あるいは写真がなければできないということです。

そういうことも踏まえつつ、私どもは例えば戦時期に関しては、資料がきちんとあるものについては出しましよう。大学が組織として、例えば戦時研究、あるいは学生の戦意を高揚するためのいろいろな行事などは、資料がきちんとあれば取り上げます。展示されている資料を見ていただいて、戦争の問題や平和の問題を考えていただくようなスタンスでやってきており、大学が組織として関わった事象については、しっかりと展示してきているつもりです。

大学紛争については、ニュース映像を置いています。地元のUHF局のKBS京都から大学紛争のニュース映像をお借りして編集し、それを流すやり方を取りました。それこそ展示がオープンした二〇〇三年のころは、当時関わっていた方たちが、大学にまだ結構残っていたので、何を言われるか分からないこともありましたが、余計なコメントをせずに、この映像を見てくださいということでの処理をしました。ただ、それも少し時間がたつにつれ、企画展で大学紛争のこともしましたので、大学としてはタブーではなくなってきたと感じつつあります。

四つ目は、「学生生活を重視する」。大学のダイナミズムを示すものは学生や学生生活ですので、それは積極的に展示するとともに、見に来られる卒業生にとつてはともうれいものだろうと思いますので、学生生活は重視した展示を作ったつもりです。

それから、これも吉川先生のお話の中に取りましたが、近年のことをどう扱うかということはとても難しい話です。これは正直言って、正面から当たることを避けています。法人化以後の歴史についても、大きなパネル一枚で済ませています。基本的にはここは歴史展示ということ、大体七〇〜八〇年代ぐらいのところ、収めています。しかし、いずれは近年の改革についても歴史的な評価のためには、沿革史の編纂が基盤になるかと思いますが、そ

ういうことも考えなければいけないと思っています。

私は現在大学文書館に勤めていて、その前は沿革史編纂に携わっていたのですが、大学史の展示は、沿革史編纂、自校教育それらとはまた違った面白さ、難しさがあると、仕事の中で実感しています。取りあえず、私の報告は以上といたします。

(にしやま・しん 京都大学大学文書館)

大学史資料を展示する ―京大での実践から―

西山 伸（京都大学大学文書館）

1 概要

場所：京都大学百周年時計台記念館 1階

時計台：1925年竣工 京大のシンボリック建物

→ 改築 2003.12完成 記念ホール、サロン、レストラン、展示室 etc

「異分野学問領域の間のみでなく大学と社会の学術的な交流のためのインターフェイスとなるような施設」

目的：「様々な形で京都大学を訪れる来学者、学内の教職員・学生、名誉教授、卒業生等を対象とし、正確な資料にもとづきながら、京都大学の創立以来の歴史と現状および未来について広くアピールする展示とする」

来場者：34462名（2013年度）

2 展示内容

（1）常設展「京都大学の歴史」

面積約 200 m² 展示品約 250 点

創立（1897年）から現在まで、8つのテーマ

文書資料（複製）、写真、キャンパス模型、下宿再現、CG映像

図録作成（日本語、英文）

（2）常設展「第三高等学校の歴史」

面積約 60 m² 展示品約 60 点

（3）企画展

面積約 40 m² 展示品 40 点前後

年 2 回開催 [別紙]

3 制作にあたっての留意点

- ・多様な展示方法を心がける
- ・研究成果の取扱い
- ・戦時期・紛争期等の取扱い
- ・学生生活を重視する
- ・近年の動き

京都大学文書館企画展等一覧

企画展

	テーマ	開始	終了	備考
第1回	創立期の京都大学 ―初代総長木下広次を中心に―	2004.6.1	2004.6.30	
第2回	総長の肖像画	2005.1.12	2005.2.27	
第3回	京都大学における「学徒出陣」	2006.1.17	2006.4.2	
第4回	戦後の学生生活	2006.8.8	2006.10.1	
第5回	京大のアーカイヴズ ―文書がひらく世界―	2007.7.3	2007.9.2	
第6回	第三高等学校の歴史 ―昭和期を中心に―	2008.1.4	2008.3.2	
第7回	京大吉田キャンパスの形成	2008.12.2	2009.2.1	
第8回	戦前の学生生活 ―創立から1930年代までの京都帝国大学―	2009.2.3	2009.4.5	
第9回	京大の1969年 ―大学文書館所蔵資料で見る―	2009.9.8	2009.11.1	
第10回	大学祭の百年 ―京大11月祭の源流をたどる―	2009.11.3	2009.12.27	
第11回	語りかけるアーカイヴズ ―大学文書館10周年を記念して―	2010.10.5	2010.12.5	
第12回	「京大俳句」と一九三〇年代の京大	2010.12.7	2011.2.6	
第13回	京大教育学部と教育学研究の戦前・戦後	2011.9.6	2011.11.6	
第14回	京大史のなかの広報	2012.1.17	2012.4.1	
第15回	屏風に名を残した教員たち	2012.11.6	2013.1.20	
第16回	戦後復興と京都大学	2013.1.22	2013.3.31	
第17回	戦時期の京大 ―「学徒出陣」70年―	2013.11.12	2014.3.2	
第18回	京大教員たちの留学体験 ―明治・大正期を中心に―	2014.3.4	2014.6.1	
第19回	儀式・行事の歴史	2014.8.5	2014.10.5	
第20回	京大経済学部の創設と河上肇たち	2014.11.11	2015.1.18	

その他の展示

	テーマ	開始	終了	備考
	時計台の昔と今			テーマ展、随時開催
	第三高等学校の歴史 ―明治・大正期を中心に―	2007.3.6	2007.5.6	テーマ展
	一中・三高・京大 ―二人が学んだ学校―	2006.11.7	2007.1.28	湯川秀伸・朝永振一郎生誕百周年記念展示

大学史資料を展示する ―京大での実践から― (西山)

大学史資料を展示する －京大での実践から－

第2回名古屋大学大学文書資料室シンポジウム
2014.11.26（於 名古屋大学ES総合館ESホール）
西山 伸（京都大学大学文書館）



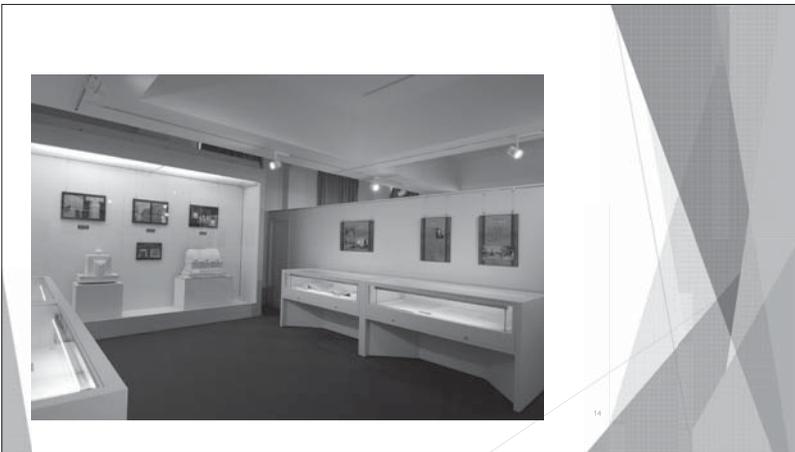


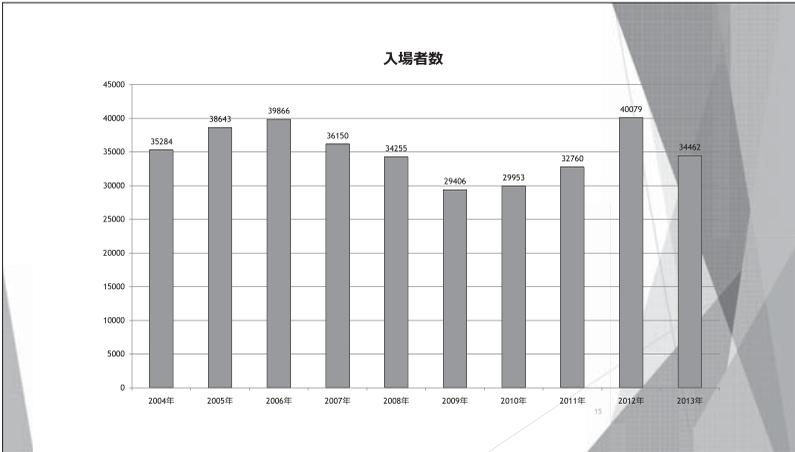














17